

没後10年

高仁鳳の軌跡

～ソウルと大阪の狭間で～



1954年秋、ソウルにて13歳の高仁鳳（1941～2012）

- 日時 ● 2023年3月4日（土曜日） 12時～17時
- 会場 ● 大阪市立生野区民センター（リゲッタ IKUNO ホール）
- 主催 ● 「没後10年 高仁鳳の軌跡」実行委員会
- 後援 ● 白頭学院建国校友会



鳳@bongのpage

QR Code はデンソーウェーブの登録商標です。

- 12:00 開 場 展示コーナー開始
- 13:00 受 付 開 始
-
- 13:30 開 会 ————— 総合司会 副委員長 足立須香
ごあいさつ ————— 「没後10年 高仁鳳の軌跡」実行委員長 岡田光司
- 13:40 講 演 — 石川亮太
「ハンゲル印刷から多言語
印刷・翻訳へ
——僑文社・ケイビーエス株式会社の歩み——」
-
- 14:40 休 憩
-
- 15:00 映 像 — 金稔万 / 安井喜雄
「ひとり放送局
——高仁鳳が猪飼野から伝えようとしたもの——」
- 15:35 独 唱 — ソプラノ 金美優 / ピアノ伴奏 呉多美
(ビデオ映像)
「가고파 (帰りたい)
그리운 금강산 (なつかしき金剛山)
우리의 소원 (わたしたちの願い)」
- 15:55 思い出を語る — 「言葉との出会い」 金吉浩
「高仁鳳さん」 鄭炳熏
「高さんとの出会いと別れ」 玉利修
「最後のドライブ」 林芳子
- 16:25 閉会のことば ————— ケイビーエス(株) 代表取締役 高允男
- 16:30 閉 会
-
- 17:00 展示コーナー終了

※表紙のQRコードは、高仁鳳の個人ページ「鳳@ bong の page」です。高仁鳳は1999年にこのページを開設し、2012年に亡くなる直前まで、日々の活動と想いを記録し続けました。故人をご存じの方はもちろん、ご存じでない方も、ぜひアクセスしてみてください。

本日は「没後 10 年 高仁鳳の軌跡 ～ソウルと大阪の狭間で～」にお集まりいただきありがとうございます。心より御礼申し上げます。

高仁鳳さんがお亡くなりになる 3 か月と 19 日前に、大阪商工会議所異業種交流会フォーラム・アイ「平和を考える勉強会」で戦中、戦後、朝鮮戦争での体験をお話いただきました。今でも印象に残っている高さんの言葉があります。「(私にとって) 朝鮮戦争に巻き込まれたことはよかった。戦後韓国に帰らず日本にずっとおったとしたら、それは苦勞無しで、幸せだったかもしれません。



だけど私は、国に帰っているいろんな体験をした。そちらの方が良かったと思う。なぜかと言うと、人生は一回しかありませんね。その一回の人生でいろんなことを体験しました。これは幸せだったと思います」。戦火の中、母を亡くし孤児になりさまよい、ソウルでやっとの思いで兄に再会。そんな尋常ならぬ体験こそが「戦争は絶対にダメだ」の強い決意を生み、「韓日の友好親善」、「南北の平和的自主統一」への実践に駆り立てました。それがまた今日のこの日、高さんの希望をみなさんにつなぐ集会につながりました。高さんの言葉は、このことさえも予感させます。

人類は有史以来何千年と戦争は嫌だ平和がいい、人殺しや盗みはやめようと「希望」に向かって努力してきました。なのに今も世界のどこかで戦争が起き、人が殺され、誰かが誰かをだましています。実際、東欧ウクライナでは戦争が起き、この東アジアでは日中韓朝の関係悪化が深刻味を帯びています。東アジアの国々で真の友好親善関係が築けるのか、はたまた南北の平和的統一はできるのか。不安にかられ、絶望に陥るかもしれません。しかし歴史を翻って、数百年、数千年前の人類に比べれば、今の我々の知識や技術は格段に進歩しています。空を飛び、月にも行く。地球の裏側の人と会話できる。民主主義国家も生まれている。半面、人類を滅ぼすほどの核兵器も持ちました。過去の人たちから見れば神様、もしくは悪魔のような存在です。それほど能力を持つに至った人類もまだその過去の人たちの希望の多くを叶えられていません。

されど 100 年、200 年後の未来の人類は果たして今の私たちに比べてどれほど進歩した知識、技術、能力を持つのでしょうか。それこそ今の私たちからすると、神様、悪魔のような存在になっているでしょう。その未来の人類は、もしかすると今私たちが持つ希望を叶えている。私たちは過去の人たちの希望を今こそ達成するために懸命に努力しないとイケません。そしてそれを未来の人たちに引き継いでいかないとイケません。それは過去の人たちから私たちにゆだねられた使命です。

同時代を過ごした「過去の人たち」のお一人高仁鳳さんの「平和への希望」、「韓日友好親善の希望」、「南北の平和的自主統一の希望」をみなさんとともに共有し、さらには未来の人たちへ引き継いでいく、今日の集会がそんな機会になることを心から願っています。

本日ご参加いただきました皆様、白頭学院建国幼小中高等学校様、ご後援いただきました白頭学院建国校友会様、在日大韓基督教大阪教会様、古河潤一様をはじめご協力いただきました皆様方、本当にありがとうございます。実行委員会を代表し御礼申し上げます。



2010年6月 広島「フォーラムアイ平和を考える旅行」

「没後 10 年高仁鳳の軌跡」実行委員会

岡田光司(委員長) / 足立須香(副委員長) / 石川亮太 / 金稔万 / 金吉浩 / 玉利修 / 安井喜雄 / 呉光現 / 金弘明 / 金良子 / 高允男 / 林芳子

ハンゲル印刷から多言語印刷・翻訳へ

— 僑文社・ケイビーエス株式会社の歩み —

高仁鳳^{コウインボン}さんは1968年に在日大韓基督教会の印刷物を担当していた僑文社を買い取り、経営者の道を歩み始めました。高仁鳳さんはその後、2003年末に社長を退任するまで、僑文社およびケイビーエス株式会社（1989年末改組）の経営者として全うしました。

僑文社・ケイビーエスの特徴は、ハンゲル（韓国語）と日本語、さらに多言語による同時組版にありました。現在ではワープロソフトで複数の言語を同時に扱うことは難しいことではありませんが、つい20年ほど前まで、それは専門的な印刷業者にとっても簡単なことではありませんでした。高仁鳳さんは様々な工夫を凝らしてそれを可能としてきました。その技術革新の過程は、韓国人をはじめとする在日外国人の増加と多様化、日本社会のグローバル化に伴う印刷ニーズの変化を先取りするものでした。

1968年当時の僑文社は、手差し印刷機による活版印刷所でした。高仁鳳さんが営業と印刷、前年に結婚された林芳子^{イムバンジャ}さんが文選と経理を担当するという小さな規模でのスタートでしたが、日本語とハンゲルの両方の活字を持っていることが特徴でした。その頃の主な顧客は大阪の在日韓国人で、在日大韓基督教会総会の機関紙『福音新聞』をはじめ、白頭学院建国学校や韓国民団、企業や個人の求めに応じて日本語とハンゲル双方の印刷を行っていました。当時すでに在日韓国人の中でも、日本語を母語とする2世たちが多くを占めつつありましたが、民族的な団体の文書を韓国語で作成したり、結婚招待状を韓国語で印刷するといった習慣も残っていました。10代前半までを韓国で過ごし、韓国語の読み書きに習熟した高仁鳳さんと、大阪で生まれ育った林芳子さんの組み合わせは、そうした在日韓国人の印刷ニーズに応じるのにぴったりだったように思います。

僑文社はその後、設備を充実させスタッフも増やすなかで、ハンゲル専門の印刷所として知られるようになっていきます。そうした僑文社の声価をさらに高めたのは、1982年のハンゲル電算写植システムの導入でした。コンピューター制御で組版・印字を行う電算写植システムは日本語でもまだ開発されたばかりで、ハンゲルのものはどこにもありませんでした。高仁鳳さんはその開発をメーカーに働きかけ、それまでのノウハウを傾けて協力し、実現に漕ぎつけました。これによって僑文社ではハンゲル組版の大幅な効率化を成し遂げ、東京の大手出版社からも辞書や語学書などの組版を受注する



2021年9月「刷り取り」整理



2022年5月(株)エス・ビー・エフ様にて



2021年8月 鄭炳采さんインタビュー

石川 亮太

立命館大学経営学部教授
専門分野は朝鮮半島・在日コリアンの歴史



ようになります。その背景には、日韓の経済や文化の交流が活発となり、在日韓国人のコミュニティに止まらず、日本社会の中で広くハングル印刷へのニーズが生じていたことがありました。

さらに1991年にはApple社のパソコン、マッキントッシュを導入します。画像処理に優れたマッキントッシュによる印刷の効率化は、その少し前から世界的なブームとなっていました。高仁鳳さんが注目したのは、その言語処理能力でした。マッキントッシュでは、日本語や韓国語だけでなく、中国語やタイ語、ベトナム語など様々なアジア言語を扱うことができました。高仁鳳さんは、そうした多様な言語を一台のパソコンで同時に扱うノウハウを構築し、ハングルだけでなく、多言語での組版・印刷を実現しました。その制作物も、在日外国人自身によるコミュニティ紙や、自治体によるニューカマー住民向けの生活案内などに広がっていきました。ケイビーエスではさらに、そのノウハウを生かして、多言語での翻訳にも乗り出しました。こうした高仁鳳さんの試みは、日本社会のグローバル化を先取りするものであったといえます。

このように高仁鳳さんの事業の意味は、日本社会のグローバル化の歴史のなかで考えることで、よりはっきり見えてきます。現在ケイビーエスに残されている創業以来の制作物は、高仁鳳さんとケイビーエスの歴史であるのと同時に、日本社会のグローバル化の歴史そのものを反映したものであり、かけがえのない文化遺産です。

あわせて記憶しておきたいことは、それらの制作に携わったスタッフの皆さんの存在です。僑文社は当初、高仁鳳さんと林芳子さんのほとんど個人企業のような形で始まりましたが、事業の拡大につれて、多数のスタッフが入れ替わりつつ参加するようになりました。1970年代まで、その多くはいわゆる在日韓国人（戦前の渡航者とその子孫）でしたが、1980年代になるとニューカマーの韓国人が増え、さらに1990年代に仕事が多言語化すると、多様な国・地域から来た留学生や結婚移住の女性がこれを支えるようになります。僑文社・ケイビーエスの制作物が、そうした外国人住民の暮らしの営みを反映したものであることもまた、忘れてはならないと思います。



2022年7月(株)友好社様にて



2022年8月(株)モリサワ様ご来社



2022年2月 高允哲さんインタビュー

「ひとり放送局」との出会い

映像作家 キム イン マン
金 稔 万



高仁鳳さんが亡くなられて10年が過ぎた。何度もあちこちで出会っているように思っていたが、振り返ると思ったよりわずかなのが残念である。2011年4月、鶴橋本通りにあるキョンチャルアパートの見学会があり、高仁鳳さんはその出っ張ったお腹の上にカメラを置くような格好でハンディーカメラを廻しておられた。その日、私は残念ながらカメラを持っていなかったのが高仁鳳さんが撮影するのが羨ましく、仕方がないので携帯で少しだけ撮影したのを覚えている。

その後、高仁鳳さんは食道癌を患われてNTT病院に入院された。見舞いに行った時もカメラを病室に持ち込んでインターネットを繋いでいる姿に驚いた。病室がまるで小さな放送局のスタジオのようになっており、闘病の様子も自身のブログ「鳳@ bong の page」で発信されていたのである。まさしく「ひとり放送局」だったのだ。

今回、「没後10年 高仁鳳の軌跡～ソウルと大阪の狭間で～」と題して高仁鳳さんの回顧展をやることが決まった。私にも1時間の映像製作の依頼が舞い降りた。最初は丁重にお断りしようと思った。短期間で1時間の映像作品を作るのは至難の業だからだ。しかし、代案として1時間の映像を30分くらいに短縮し「展示」を逆に提案することで受けることにした。映像は単に上映の時間ではない。言葉ではとらえられない映像の奥深い世界感やそれを創り出すための試行錯誤をまずは知ってほしかったのである。

高仁鳳さんの精神的なバックグラウンドである在日大韓基督教会と建国学校の撮影と取材の協力も必須条件だと伝えた。もちろん曹智鉉さんたち先人の方々が遺された猪飼野の「アーカイブ」の風景も必須である。映像のタイトルは金吉浩さんが高仁鳳さんをモデルに書いた小説のタイトルをお借りして「ひとり放送局」とした。そして、副題は「高仁鳳が猪飼野から伝えようとしたもの」にした。撮影は意図的にカメラを複数台使用して出来るだけ実行委員会の方々にも手伝ってもらうことにした。建国学校の伝統芸術部第10回定期公演「夢舞」では実際に三脚にカメラを据えてフィックスの映像を撮っていただいた。三脚の重みや映像を撮ることの臨場感やリアリティを実感し、映像が持つ言語化しえない何かをリアルタイムで体感してほしかったのだ。

今、もし高仁鳳さんと一緒にかつての猪飼野で映像製作をすることができるのであれば、私は高仁鳳さんのお腹に代わって巨大な「三脚」を用意しようと思う。高仁鳳さんのお腹で熟成された映像もすてきだが、この猪飼野の劇的な変化をとらえるにはどっかりと地に据えた頑丈な「三脚」に支えられ撮られたフィックスの映像も必要だ。ソウルと大阪の狭間に、在日一世と二世の狭間に、戦争と戦争の狭間に生き抜いた高仁鳳さん。決してメインストリームではなくマイノリティーとして「ひとり放送局」をおおらかに貫いた高仁鳳さんに賛歌を送りたい。

かつての猪飼野で、まだ視ぬ「アーカイブ」を可視化することができるのか。そのための我々の「記憶装置」をいかに協働して大衆的、民主的に作り出していくことができるのか。確固としたプラットホーム＝「三脚」を、激変する猪飼野の今昔の風景の狭間に据え、定着させることが出来るのかどうか問われている。「ひとり放送局——高仁鳳が猪飼野から伝えようとしたもの」の製作を通じて、それらのことを垣間視ることが出来ればと思う。この猪飼野に無数の「ひとり放送局」の登場を願いながら。

建国「幻のフィルム」作成に関わって

神戸映画資料館館長 安井 喜雄



2005年のこと、韓国映画を日本に紹介し続けていたアジア映画社の朴炳陽さんからビデオ作りに協力してほしいと依頼があった。兄の朴炳昭さんが前年に亡くなり、遺品の中にあつた古いフィルムを使ってビデオを作る計画とか。朴炳昭さんは建国の10期生で、学校創立期の貴重なフィルムを学校から預かっていて、死を契機に学校に返却したところ、同じ建国12期生の高仁鳳さんがそれを発見、それを活用して学校の創立60周年記念式典で上映し記念品として配布するためにビデオ作りを進めているとのことだった。仁鳳さんにとっては初めての作業で、朴炳陽さんに編集者を探して欲しいと頼んでいたようだ。

早速、朴さんの案内でKBSを訪問し仁鳳さんに面会、製作の主旨や方針などの話を伺った。通常のテレビ番組なら撮影に3～4日、仕上げに1週間もあれば大車輪で編集と録音をして放送できるので、そんなに大仕事とは思わず気軽に引き受けた。まずは編集のための素材を拝見し、構成台本の作成にかかった。白頭学院創立50周年記念誌や在日関連の書籍などを参考に観客に感動してもらえるように構成を練った。提供を受けた素材のフィルムだけでは一般観客には馴染みがないので、歴史的な客観性を持たせるために私たちが運営するプラネット映画資料図書館が収集した阪神教育闘争や戦後大阪のカラー映像なども活用する構成にした。早速それを元に仮編集を始めた。その頃はまだテープからテープへの繋ぎ編集だったので、一旦繋ぐと後から別の映像を挿入することはできない。ところが仁鳳さんからは、カットの順番を変えて欲しい、途中で新撮場面を入れたい、など注文が次々に出て困り果ててしまった。通常のテレビ番組作りではないので私は引き下がり、カットの入れ替えが自由にできるパソコン編集に切り替えるようお願いし、編集者を新たに探して貰うことになった。暫くして編集者として森川法夫さんの参加が決まり、私は安心した。これで編集が順調に進んで行くように思っていたが、いつまで経っても完成しない。編集途中のバージョンを見せてもらうためにKBSまで何度も出向き、感じたままの意見を述べた。見る度にカットの順番が変更され、新たな場面が追加されていて驚いた。森川さんも追加や手直しが多く困っておられたようだ。仁鳳さんの熱意が尋常ではなく、編集者泣かせの長時間作業となった結果、最終版が見応えあるものになったのは仁鳳さんの粘り勝ちといえる。

何ヶ月もかけて編集を終えた後、ナレーションを書くことになった。映像の長さに合うように台本を作成し、高仁鳳さんによる修正をもらい、私がいつも使っている録音スタジオで音の最終仕上げを行った。仁鳳さんは建国の卒業生からナレーターの郭允美さん、テーマソングの金智子さんと優秀な人材を見出してきた。

そしてようやく完成したものは帝国ホテルで開催された「白頭学院創立60周年記念式典」でお披露目上映された。私も朴炳陽、森川法夫、郭允美、金智子の諸氏と共に仁鳳さんから壇上に呼び出されたので恐縮した。

あの貴重な16ミリ・フィルムはKBSでちょっと見ただけで、編集に使ったのはミニDVテープだった。仁鳳さんの没後10年に際し、その貴重性が改めて浮き彫りになって来た。できることなら現行のハイビジョンかそれ以上の4K、更には8Kスキャン、出来れば長期間保存に適したフィルムに複製して残したいと思っている。古いフィルムは経年変化で年々劣化が進むので早めに行動しないと取り返しのつかない事態が起こらないとも限らない。皆さまのご協力を切にお願いしたい。



2005年 建国卒業生と「幻のフィルム」を見る

「高仁鳳の軌跡」に寄せて

この度は諸事情により映像にて演奏をお届けさせていただくことになりました。

1曲目の「カゴパ (帰りたい)」は、故郷を離れて異郷に暮らす日コリアンの心情を表現する歌として選びました。2曲目は「懐かしき金剛山」ですが、亡き高仁鳳さんの願いはやはり朝鮮半島の統一であったと思います。金剛山は北側にあり、現在は自由に往き来できない場所ですが、歌詞にあるように、自由万民が襟を正して金剛山を訪れる日が一日も早く来るよう、願いを込めて歌わせていただきます。(金美優・呉多美)

● カゴパ
가고파

作詞 李殷相 作曲 金東振

내 고향 남쪽바다 그 파란 물 눈에 보이네
꿈엔들 잊으리요 그 잔잔한 고향바다
지금도 그 물새들 날으리 가고파라 가고파
어릴 제 같이 놀던 그 동무들 그리워라
어디간들 잊으리요 그 뛰놀던 고향 동무
오늘은 다 무얼하는고 보고파라 보고파

그 물새 그 동무들 고향에 다 있는데
나는 왜 어이타가 떠나 살게 되었는데
온갖 것 다 뿌리치고 돌아갈까 돌아가
가서 한데 얼려 옛날같이 살고 지고
내 마음 색동옷 입혀 웃고 웃고 지내고저
그날 그 눈물 없던 때를 찾아가자 찾아가

【日本語訳】 帰りたい

わが故郷 南方の海 青い水が目に浮かぶ
夢にも忘れようか 穏やかなる故郷の海
今もきっと水鳥が飛びかっているだろう
帰りたい 帰りたい
幼い頃 共に過ごした友人たちが懐かしい
どこに行こうか 決して忘れない
いま みな どうしているだろうか
会いたい 会いたい

水鳥や友人たちは みな故郷にいるのに
私はなぜ 故郷を離れてしまったのか
すべてのものを投げうって
帰ろうか 帰ろうか
帰郷して みなとともに
むかしのように暮らそうか
心にセットンチョゴリを着せて
笑いながら しあわせに過ごしたい
泣かずに暮らせた その昔に
戻りたい 帰りたい

● クリウン クムガンサン
그리운 금강산

作詞 韓相億 作曲 崔永燮

누구의 주제런가 맑고 고운 산
그리운 만이천봉 맑은 없어도
이제야 자유만민 웃길 여미며
그 이름 다시 부를 우리 금강산
수수만년 아름다운 산 못 가본지 그 몇 해
오늘에야 찾을 날 왔나 금강산은 부른다

비로봉 그 봉우리 예대로 인가
흰구름 솔바람도 무심히 가나
발아래 산해만리 보이지 마라
우리 다 멧힌 슬픔 풀릴 때까지
수수만년 아름다운 산 못 가본지 그 몇 해
오늘에야 찾을 날 왔다 금강산은 부른다

【日本語訳】 クムガンサン 懐かしき金剛山

誰が創りし清らかなる 麗しき山 懐かしき
一万二千の峰々よ 言葉こそは出さねども
自由万民 今こそ 襟を正して
その名を呼ぶ われらの金剛山
数万年を 経てもなお 麗しき山よ
訪ねることが叶わなくなって 幾とせ
今こそ いざ行かん
金剛山は 呼んでいる

ビロボン 毘盧峰 そびえ立つ 昔のままであろうか
白き雲 松風 無心に流れゆく
眼下に広がる 山海万里を見てはならぬ
我らが固く誓った願いが 叶うまでは
数万年を 経てもなお 麗しき山よ
訪ねることが叶わなくなって 幾とせ
今こそ いざ行かん
金剛山は 呼んでいる

ウリエソウォン
● 우리의 소원

作詞 安錫柱 作曲 安炳遠

《解説》1947年の韓国の童謡で、朝鮮半島全体だけでなく、日本をはじめ広く歌い継がれています。

安錫柱 作詞
安炳遠 作曲

少しゆっくり *mp* E^b B⁷ E^b Cm B⁷ E^b B^b

우 리 의 소원 은 통 일, 꿈 에 도 소원 은 통 - 일. 이

정 성 다 해 서 통 일, 통 일 을 이 루 자 - 이

mf A^b E^b A^b E^b B^b

겨 레 살 리 는 통 일, 이 나 라 찾 는 데 통 - 일. 통

E^b B⁷ E^b B^b E^b

일 이 여 어 서 오 라, 통 일 이 여 어 오 라 -

私たちの願い

わが願いは統一	夢にみるは統一
心あわせ統一	統一なそう
民族の願い統一	国をあげて統一
統一早くこい	統一なそう



※大阪市外国人教育研究協議会『サラム音楽編』ブレンセンター、1991年

プロフィール



独唱 ^{キム ミ ユ} 金 美 優

1946年1月22日、在日韓国人1世の父と日本人の母の間に大阪で生まれる。白頭学院、建国小学校、中学校・高等学校を卒業。近畿大学薬学部卒業。大阪音楽大学短期大学部二部音楽専攻科卒業。病院薬局、漢方薬局などに勤務。大阪市立北鶴橋小学校の民族学級の講師、音楽専科講師を歴任。ソロリサイタルを開催。ウィーン国立音楽大学研修セミナーにてディプロマ取得。韓国民団大阪府地方本部婦人会コーラスの指揮者歴任。

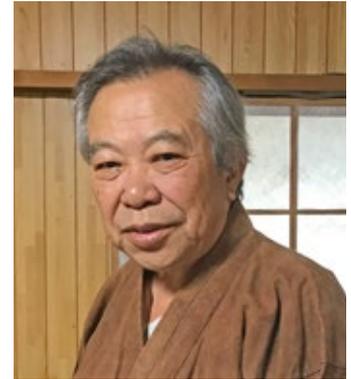


ピアノ伴奏 ^{オオ タ ミ} 奥 多 美

在日コリアン3世として大阪府で生まれる。相愛大学音楽学部ピアノ専攻を卒業し、渡韓。ソウル大学音楽大学院器楽学科修士課程を卒業。ボン大学に1年間留学。在欧中にウィーン音楽大学マスタークラスなどで研鑽を積む。大阪国際音楽コンクールや日本クラシック音楽コンクールなどで受賞。現在、相愛高等学校で後進の指導を務めつつ、関西圏の学校・幼稚園などでアウトリーチコンサートやクラシック音楽と絵本のコラボレーションなどの公演を行なっている。オンガージュ・サロン (EngageSalon) 主宰。

「言葉との出会い」

作家 キム キル ホ
金 吉 浩



「君が日本人だったら私は反対する。しかし、君は在日韓国人だから賛成する。なぜなら、君はこれから在日社会に必要な人材からだ!」

「本当ですか? 感動的な話ですがどこか気障っぽく聞こえますが……」

「私も最初はそう思った。しかし私は本気だった。反対されたら会社を辞めるつもりだったから。私も社長の真心のその言葉には感動して驚いた」

20 余年前のある日、居酒屋「太郎」で高仁鳳社長から聞かされた話だった。「太郎」はケイビーエス(株) 会社から5軒隣の西にある居酒屋で、私は高仁鳳社長と頻りに会っていた。お世辞でも綺麗とは言えない居酒屋だったが、美味しい、安い、またマスターの独特な個性が話題になり、いつも繁盛している店で、高社長を囲むたまり場だった。(マスターが高齢のため2022年3月閉店。非常に残念!)

1962年建国高校を卒業した高仁鳳さんは、その年の4月、合成樹脂工業新聞社に記者として入社した。その翌年、1963年が明けた時に、高社長は仕事をしながら夜間大学に入学したいと新聞社社長に申し入れた。

その話を聞いた日本人の社長が、迷うこともなく賛成してくれた時の話だった。

新聞記者の仕事は、一般的に午前中には取材に出かけ、午後からは記事を書くため最も忙しい時間である。その時間帯に夜間学校が始まるのに、社長は快諾してくれただけではなく、大阪経済大学に入学した時は祝い会も開いてくれたという。

초 혼 (招魂) 김 소 월

●金素月(キム・ソウォル、1902-1934)
韓国で最も知られている詩人。流れるような韓国語でもって情と恨(ハン)を独特の音律で表現して、民族詩人と言われている。

산산히 부서진 이름이어!
허공 중에 헤어진 이름이어!
불러도 주인 없는 이름이어!
부르다가 내가 죽을 이름이어!

심중에 남아 있는 말 한마디는
끝끝내 마저 하지 못하였구나.
사랑하던 그 사람이어!
사랑하던 그 사람이어!

붉은 해는 서산 마루에 걸리었다.
사슴의 무리도 슬피 운다.
떨어져 나가 앉은 산 위에서
나는 그대의 이름을 부르노라.

설움에 겹도록 부르노라.
설움에 겹도록 부르노라.
부르는 소리는 빗겨가지만
하늘과 땅 사이가 너무 넓구나.

선 채로 이 자리에 돌이 되어도
부르다가 내가 죽을 이름이어!
사랑하던 그 사람이어!
사랑하던 그 사람이어!

散り散りに砕け散た名前よ!
虚空に消え行く名前よ!
呼ぶも主のない名前よ!
呼び続け我が死ぬ名前よ!

心中に残る一言は
最後の最後まで言い切れず
愛したあの人よ!
愛したあの人よ!

赤い日は西山の尾根にたたずむ
鹿の群れも悲しく哭く
隔てられた山の上で
私はあなたの名前を呼ぶ

悲しみの余りに呼ぶ
悲しみの余りに呼ぶ
呼ぶ声はすれ違うが
天と地の間が遠すぎる

立ったままここで石になっても
呼び続け我が死ぬ名前よ!
愛したあの人よ!
愛したあの人よ!

1947年母、兄と韓国に帰国して、朝鮮戦争の中で兄は兵隊に、母は1952年、病気で亡くなり、小学校5年生の時は孤児になった。極限状況に陥っても屈せずに、1957年にまた日本に戻って、1968年僑文社を買い取り、今日の「ケイビーエス(株)」になった。新聞社社長の言うとおり、在日社会はもちろん、日本社会にも貢献した。

「太郎」で断片的に聞かせてくれる波乱万丈の話をする時も、高仁鳳さんの独特な笑顔は変わらなかった。誠実なクリスチャンの家庭の主にも不謹慎かも知れないが、その笑顔は仏さまの慈悲に満ちた笑顔を連想させられた。

記憶の片鱗として化石のように刻み込まれた高仁鳳さんの話が、いつからか私には小川の水のせせらぎのように聞こえた。私は高仁鳳さんのこうした話を小説に書くことを決めた。

私は聞かされたこれらの話をパズルのように合わせて、2016年「韓国文人協会」(会員数約15,000人、機関文芸誌は毎月「月刊文学」と、季刊誌「韓国文学人」発行)が発刊する季刊文芸誌「韓国文学人」春号に、短編小説「喜로망송국〈ひとり放送局〉」を、韓国語で書いて発表した。

「高仁鳳さん」

元 コリアボランティア協会代表代理 チョンピョン フン
鄭 炳 熏

高さんは、10(とお)下の私の20代30代の多くの部分に影響を与え続けた方でした。

韓国での語学留学から帰阪し、職を求めてさまよっていた時に飛び込んだのが、当時の僑文社(現在のKBS)でした。ハンゲルが多少できるということですぐに雇っていただきました。仕事の指導はもちろんですが、いろいろ社会勉強もさせてもらいました。

ハンゲルの電算写植に就かせていただいたことで、そこで得たスキルは今も役立っております。

これは特筆すべきことですが、母親も採用していただき、一時、親子で入社していました。また、のちに社員となったIさんは、私が40代でコリアボランティア協会の専従となった時、流れてIさんも専従となり、得がたい人材となりました。退社後、私の幼い頃からの夢である「世界旅行」に旅立つ際には、経済的に大いに助けていただき、夢を果たすこともできました。

また、母親の場合は、「マダンの児」(マダン:広場くらいの意味)というタイトルで幼い頃の渡日史を中心とした身の上話を、社内報に10回にわたり連載されました。数年前には、同タイトルで出版までしていただき、最高の親孝行までさせていただくことができました。感謝にたえません。

常に弱者にやさしかった高さんにあやかり、またその果てなき好奇心を見習って、これからもボランティア活動に励んでいきたいと思っております。本当にありがとうございました。



版下作業の様子(1980年代)



2021年10月 KBSまだんにて

「高さんとの出会いと別れ」

(株)バルフィット 代表取締役 玉利 修

高さんとは20年程前、異業種交流会フォーラム・アイで出会いました。

片手にビデオカメラ片手にビールそしてマウンテンバイクに乗っていました。このマウンテンバイクが盗まれて、ダホンの折り畳み自転車に乗り換えされたのですが。

高さんはフォーラム・アイ会員に凄く慕われており、信頼され愛されておりました。フォーラム・アイの活動の記録は高さんがしたため、今でも高さんのページから懐かしく観ることが出来ます。今はその代わりがありません。

高さんとは馬が合うというか気が合うというか可愛がってもらい、ずいぶんと飲ませていただきました。夕方いい時間になると「玉利いま何処におるんや。太郎にいるからすぐ来い!」「今、桃谷のどこそこにおるからすぐ来い!」なんて……。そこで幼少の頃の話や孤児になった話やお兄さんを探し手紙を書いた話とか、どうやってまた日本に帰って来たのか、ドラマのような話をたくさん聞きました。

笑い話ですが、飲み会で隣に座った女子の耳たぶを触っているのです。高さんにどうして触っているのですかと聞くと、お母さんの乳首みたいやからと……。小さいころ本当に寂しかったのでしょね。

バンジャさんをどうやってゲットしたのですか?と聞くと—ある時、教会に行くと、可愛い子に一目惚れし目はハートマーク♡ それまでは教会に行くのをサボってばかりだったのに、急に真面目に行くようになって、青年インボンさんはやっとなんかバンジャさんと付き合えるようになったそうです。車のボンネットの上にバンジャさんを乗せて二人で写っている写真を見せてもらいましたが、本当に好青年と可愛いバンジャさんでした。

僕と高さんは、趣味のカメラや自転車や旅行のことで話が弾み、フォーラム・アイでは親睦旅行を二人で担当し世界遺産等いろんな所へ行きました。必ず折りたたみ自転車をバスに詰め込み現地でポタリングです。また、生野の歴史や大阪近隣の歴史を知ろうということで「自転車めぐり」の分科会も立ち上げ、高さんのネットワークで東京等からも参加者を募り、生野・和歌山加太・奈良明日香・京都・滋賀近江まで足を伸ばし、自転車でゆっくり走りながら歴史勉強会をしました。ある時は会員のトラックを借りてフォーラム・アイのメンバーや家族の自転車を積んで総勢30名位を連れて、木之本から長浜まで、途中、朝鮮通信使の雨森芳洲記念館などを訪問したり、刀剣博物館などに寄ったりで楽しい思い出が一杯です。その時に参加した子どもさんたちは、今では立派な社会人になって活躍しています。

また、上方ポタリング倶楽部も立ち上げ2010年10月には、サイクリストの憧れの聖地「しまなみ海道」に2泊3日の自転車旅の輪行に行きました。しかし2日目の大三島で道を迷ってしまって、行けども行けども食堂やコンビニもなく、やっとなんかクタクタになり遅い昼食にありつけたのですが、最悪だったのが宿泊先の因島の山の上のホテル、しかも遅くなってしまい、まわりは真っ暗、マイクロバスが迎えに来る予定が、終わってしまい、トボトボ自転車を押しての登山コースになってしまいました。

高さんは、疲れたうえに空腹で低血糖症になってしまい、皆で肩を抱え他の者は自転車を押してやっとホテルに着いたのです。高さんは、流動食しか喉を通らず、と言ってもビールですが……。このような高さんとの思い出は語り尽くせません。

高さんが2度目の入院をされお見



因島ロッジにて 2010年10月

舞いに行ったのですが、数日すると今では亡くなられた新井（朴正泰）さんから電話があり、「玉利さん、高さんの容態が思わしくない!すぐに病院に行ってくれ!」。病院に行ってみると高さんは酸素マスクを付け、苦しそうにしており喋れない状態でした。それでも高さんは、僕の手を固く握りしめ何かを話したそうでしたが、分かりません。僕には、絶対克服して打ち勝つと言っているように聞こえました。どれだけの時間が過ぎたのでしょうか……。仕事に戻らなければならない時間になってしまいました。高さんは、手を放してくれませんが、「高さん、また来ますからね!」と言うと、やっと手を放し、右手を高く上げてゆっくりと手を振ってくれました。それが高さんとの最後の別れの日になりました。

今でもその時の情景が目には浮かびます。そして高さんの気が済むまでその場に居られなかったのかと後悔したりします。

「最後のドライブ」

イムバンジャ
林芳子

2012年12月1日、土曜日だった。それまで毎朝、近くの公園などを散歩していた。しかし歩くことがしんどくなっていた。その日は私の運転でドライブをすることにした。ドライブなら座ったまま移動できる。

朝10時ごろ夫を助手席に乗せて自宅の駐車場からそろそろ出てゆっくりと公園の方へ走り出した。すぐ左手に葬儀社の店がある。助手席の窓の方を見ると、今ちょうど店から大きな箱のようなものを抱えて、何人かで運び出しているのが見えた。私はとっさに夫に話しかけ、向こう側を見ないよう注意をそらした。

—それは棺桶だった。私は見てはいけないものを見たような、言い知れない不安で胸が押しつぶされそうだった。しかし何気ない素振りでも車を走らせ、景色のことやたわいのことを話しかけた。夫はずっとビデオカメラを胸に抱えて撮っていた。

細工谷交差点のところで信号待ちしていると、免許証を取って初めて夫を乗せた時のことが思い出された。あの時、信号待ちになったとたん「ボクが運転する」と言ってさっさと代わってしまった。けれどその日は何も言わなかった。玉造筋をまっすぐ森ノ宮方面へ北に進み、大阪ビジネスパークを抜けて、天満橋に出た。そこから中之島公園の中に入って車を止め、少し散歩しようかと降りた。空気が冷たい。青空は見えるが冷気が覆いかぶさってくるようだった。休めるところがないかと公会堂の方へ行った。しかしどこにもなかった。川べりのほうに行き、ちょうど清掃の人がいたので写真を撮ってもらった。それを夫はすぐフェイスブックに投稿したようだ。

土佐堀川と堂島川に挟まれた中之島公園は、よく手入れされ、コンクリートで護岸されている。座って休むところもなく、夫は少し歩くだけで息が切れる。温かくしてきたつもりだったが出かけてきたことが悔やまれた。



中之島公会堂前で

すこし行くと弁護士会館があった。駐車もできるので入ってみると、土曜日のせいか人影がみあたらない。広いロビーの座席にふたりでホッと落ち着いた。ここはトイレもあるし、総ガラスの窓から日が差し込み温かい。しばらく休むことにした。

それからこんどは御堂筋に出て、淀屋橋、本町、心齋橋、なんばへと南下。26号線から四天王寺の西門を通り過ぎ、25号線の寺田町・源が橋のところを猫間川筋へ戻って来た。家に着くとちょうど午後1時だった。

夫が逝った後、その時のビデオを見ると、1、2分おきの細切れの撮影になっていた。ビデオカメラを胸に抱える力も、もうなかったのだった。

このとき、中之島公園でのFBへの投稿が最後になった。(左の写真)

●高仁鳳の生い立ち



1941年に大阪市此花区で生まれた高仁鳳は、日本敗戦後の1947年、母の玄行春・兄の高仁守とともに朝鮮に戻った。父の高元国は事業のため大阪に残った。

①は1946年に生駒山で父と撮った写真、②は帰国直前の母子の写真である。



朝鮮に戻った母子は全羅北道の裡里（イリ）という街で暮らすことになった。1950年に朝鮮戦争が始まり、兄が従軍するさなか母親が病死、高仁鳳は一人になってしまった。母親は③の部屋で、「お前をひとり残しては死ねない」と繰り返しながら息を引き取ったという。



孤児同然となった高仁鳳は叔父の家に引き取られたが、叔父が軍隊に行くと、高仁鳳は学校にも通えなくなった。そんな高仁鳳を支えてくれた友人が張哲雄（チャン・チョルン）だった（④右）。

高仁鳳は張哲雄から本を借りては知識欲を満たした。張哲雄の母は、いつも腹ペコの高仁鳳を気遣って、パフモゴンニャ？（ごはんたべた？）と、やさしく聞いてご飯を食べさせくれた。



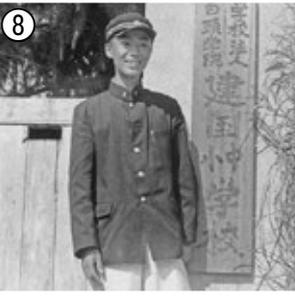
この頃から高仁鳳は教会に通い始めた。

⑤は、子どもの頃に通った裡里新光教会を1966年に再訪した時の写真。教会の階段に刻まれた、「私は道であり、真理であり、いのちである」という聖書のこぼを、高仁鳳は生涯忘れなかった。



高仁鳳は1954年9月、軍にいるはずの兄を探してソウルに上り、声を掛けてくれた理髪店に住み込みで働くことになった。近所の映画館にこっそり入れてもらい、西部劇やディズニーの映画を見るのが楽しみだった。

⑧は数少ないその頃の写真、着ているジャンパーは理髪店の娘のおさがりだった。⑦は1966年に理髪店を再訪した時の写真。



やがて除隊した兄はソウルで高仁鳳に再会、弟の将来を案じ、日本にいる父親のもとに送ることにした。高仁鳳は1957年7月大阪に着き、白頭学院建国中学校の2年生に編入した⑨。6年ぶりの学校だった。

1962年に建国高校を卒業した高仁鳳はジャーナリストになる夢を抱き、合成樹脂工業新聞社の記者になった⑨。「在日韓国人を背負う人間になってほしい」という社長の計らいで、大学の夜間部にも通うことができた。



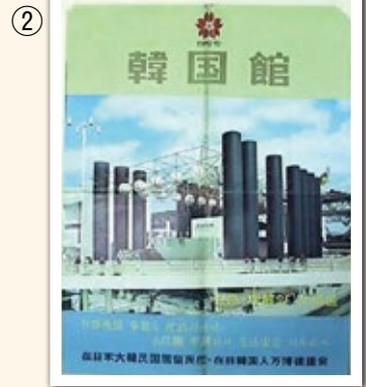
1967年には在日大韓基督教会の聖歌隊で出会った林芳子と結婚した。⑩は結婚の挨拶状に添えるため、東大阪の瓢箪山の新居で撮った写真。

●高仁鳳と僑文社・ケイビーエス



① 高仁鳳は1967年に在日大韓基督教会の西成教会にあった印刷所「僑文社」を友人と買い取った。広さ9坪、トタン屋根の作業場からのスタートだった。高仁鳳が営業と印刷、林芳子が文選と経理を受け持った①。

日本語とハングルで印刷していた僑文社の初期の仕事は、在日大韓基督教会や領事館、韓国民団、建国学校などの印刷物の制作だった。1970年の大阪万博では韓国館の印刷も担当することになり、初めてのカラー刷りでポスターを制作した②。



③ 1982年に世界で初めてのハングル電算写植システムの開発に関わり、日本で唯一導入した③。これによって僑文社は、ハングル印刷の専門企業として全国的な声価を確立することになった。

1980年代になると、日韓関係の深まりを背景に、在日韓国人の枠を超えてハングル印刷の需要が高まった。僑文社でも角川書店『朝鮮語大辞典』補巻(1986年、④)や三修社の月刊『基礎ハングル』(1985~87年、⑤)などの組版を担当した。



⑥ 僑文社の社屋は最初の西成から桃谷を経て、1977年に現在の勝山北に移った。⑥は1988年の新年会の写真。ハングル入力のためニューカマーを含めて多くの韓国人が働いていた。

1989年12月に株式会社設立、社名も現在のケイビーエスとなった。1992年からマッキントッシュを利用した多言語印刷に取り組み、さらに業務の幅を広げた⑦。高仁鳳は2003年に社長を長男の高允男に譲り、会長に就任した。



「できるかな?にチャレンジ」

私はよく夢を見ます。寝ているときに見るあのユメではなく、「空を飛べたらいいのになー」とかそういうもの。つまり願望のようなものです。

私がレックスシステムを導入するとき「ハングルができそうだ」と思ったから、チャレンジしたのです。いま、これがKBSの主力になっています。

レックスシステムを製造したリョービの会社技術部も、ワープロでは書体変更は不可能と言われましたが、私はできると信じました。すると、いまKBSでは、ハングルの書体指定もワープロでできるようになりました。

私は映画が好きです。なぜならユメがあるからです。好きな映画の中に「E・T」があります。その中に子供たち

が自転車に乗って空を飛ぶシーンがありますが、あれは子供たちが「飛べるんだ」と信じたから、飛べるのです。

いまKBSではまた新しくMacを導入しました。これにはユメがありそうなんです。

なにがあるか、まだわかりません。しかし、何かがありそうです。それを見つけてます。きっと。

できると思ったらできます。

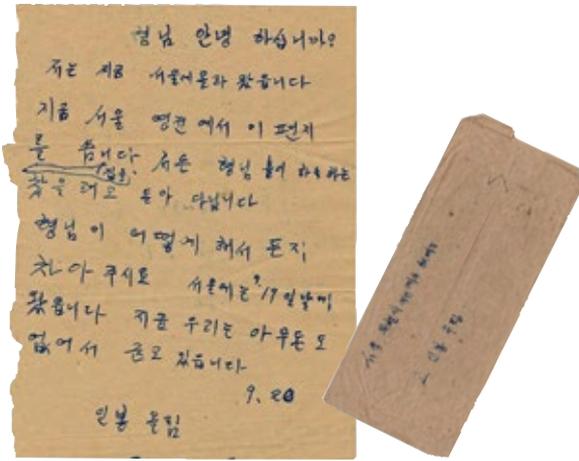
「하면된다」<ハミョンテンダ、為せば成る>

みなさんチャレンジしてみてください。

大いに冒険しましょう。失敗は成功の母です。失敗を恐れることはありません。特にKBSでは。

(社内報「ナルゲ」創刊号(1994年)に高仁鳳が寄せた文章)

兄 への手紙



〈手紙の訳〉

兄さん、お元気ですか。
 ぼくは、いまソウルにきています。ソウルの駅前でこの手紙を書いています。
 ぼくは兄さんが下宿している家を探しまわっています。
 兄さんが(ぼくを)なんとかして捜してください。
 ソウルには9月19日に来ました。いまぼくはお金もなく、何も食べていません。

9月20日 インボンより

〈封筒訳〉

ソウル特別市駅前でうろろろしている
 コウインボンより

1954年9月19日、軍隊にいる兄・高仁守を探してソウルに上った高仁鳳は、まず兄の友人の家を訪ねようとしたがすぐには見つからず、困り果ててソウル駅から兄に手紙を出した。その後、なんとか兄の友人の家にたどり着いた高仁鳳の後を追うように、手紙を見た兄から「必ず恩は返すから、もし弟が来たら何とかしてほしい」との便りが届いたという。しかしその家でも、高仁鳳を長く住ませる余裕はなかった。高仁鳳は隣の理髪店の主人から、「無給でよければ、ご飯だけは食べさせてやるから働かないか」と誘われ、住み込みで働くことになった。この手紙はその後も高仁守が大事に保存していた。

電 算写植システム (入力校正機)



2022年8月(株)モリサワ様ご来社時の模様

1981年に角川書店から『朝鮮語大辞典』補巻の組版を打診された高仁鳳は、作業の効率化のために電算写植システムでの入力が必要だと考えた。しかしその頃、日本語の電算写植も実用化されたばかりで、ハングルの電算写植は世界のどこにもなかった。高仁鳳は写植機メーカーの(株)モリサワに相談し、その開発に協力した。日本語版の入力校正機 MCT10 をカスタマイズする形で日本語・ハングル兼用の機材が作られ、1982年9月に第一号機が僑文社に導入された。僑文社のハングル組版の効率化に大きく貢献した入力校正機は、第一線を退いた今も、ケイビーエスに保存されている。

自転車・「ウリナラ全国自転車巡礼」の旗

高仁鳳は2001年頃からマウンテンバイクに乗るようになった。大阪商工会議所異業種交流会フォーラム・アイの仲間と街乗りを楽しむようになり、生野の中小企業のモノづくり力を結集して自転車を作ろうというプロジェクトにも協力した。完成した自転車は2004年にイタリア・ミラノの国際見本市に出展された。2008年には友人の朴正泰や金吉浩と「ウリナラ全国自転車巡礼」と銘打って韓国縦断の自転車旅行を始めた。釜山から始めて月1回のペースで走り継ぎ、距離を伸ばしてゆく計画だった。特注の旗のデザイン案には初め、南北を隔てる軍事境界線が描かれていたが、高仁鳳は「祖国は一つだ」と言ってこれを消させたという。「北緯38度線を自転車で越える！」がスローガンだった。



2009年3月 朴正泰さん(右) とともに

建国学校「幻のフィルム」

1962年に12期生として白頭学院建国高校を卒業した高仁鳳は、学院のハングル印刷物の制作に携わるのと同時に、校友会の活動にも熱心に関わった。2005年には白頭学院60周年記念誌の編集委員長となり、取材のために日本と韓国にいる同窓生をインタビューして回った。その中で1946年の開校直後からの学校の様子を記録したフィルムを発掘し、デジタル化した上でDVD「幻のフィルムでつづる建国の60年」を制作した。開校直後の映像は、講師を務めていた梁健黙が16ミリフィルムをアメリカ軍から入手して撮影したもので、ケースには「第1期1946年 建国生の一曰」と書かれている。このフィルムは現在、白頭学院に保存されている。



2023年1月白頭学院でフィルム調査

● 僑文社・ケイビーエス制作物展示リスト ●

- 結婚式請牒状(高仁鳳・林芳子)、活版、1967年
- 福音新聞(在日大韓基督教会総会)241号、同上、1969年
- 大阪万博韓国館ポスター(韓国国民団・在日韓国人万博後援会)、オフセット、1970年
- 統一(統一社)創刊号、手動写植、1972年
- 済青春秋(済州青年会)8号、同上、1973年
- 本名を正しくよぶための人名仮名表記字典(人名仮名表記字典刊行会)、同上、1975年
- 基礎ハングル(三修社)5号、電算写植、1985年
- 朝鮮語大辞典(角川書店)補巻、同上、1986年
- 在日韓国人実業名鑑(共同新聞社)、同上、1989年
- コゲ(在日大韓基督教婦人会全国連合会)8号、同上、1990年
- コリア就職情報(コリアファミリーサークル)17号、電算写植、1991年
- 愛郷無限: 在日本済州開発協会30年誌(在日本済州開発協会)、同上、1991年
- We're(ザ・サードアイ・コーポレーション)第1巻第5号、DTP(Mac)、1992年
- パーン・ラオ(ワラボラ)2号、同上、1994年
- 済民日報日本語版(済民日報社)6号、同上、1997年
- 白頭学院記念誌(40、50、60、70周年)、電算写植~DTP(Mac)、1987~2017年

※事情により変更することがあります。

コウインボンとの関わり、想い、ひと言

高仁鳳さんが紡いでくれたご縁は、
今もつながっています！

一般社団法人ひとことつむぐ代表理事 足立 須香



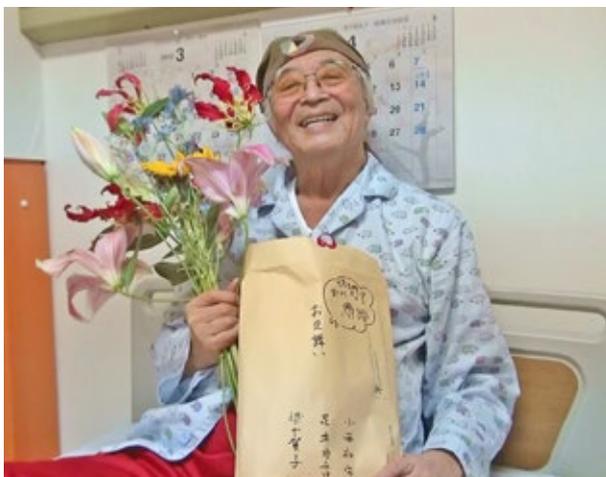
2018年の夏に「高仁鳳の
つれあいです。」

朴イエファさんが書かれ
た「マダンの児」の出版にあ
たってアドバイスしてほしいと
芳子さんからご連絡をいただ
いたことが本日の開催につな

がったと思います。高仁鳳さんとの出会いは……在
日コリアンに関するイベント等に参加するたびにそこ
におられるのでいつの間にかお話しするようになり
ました。いつもビデオカメラを首にかけて、ニコニコ
しながらでも時には大胆に撮影されていた様子が目
に浮かびます。

「なぜ、日本人なのに在日のことをそんなに関心
を持っているのか」と真剣に問われたこともあり
ました。私が御幸森小学校に在職中に地域で開催
していた「猪飼野おとな塾」でも「ウリナラ韓国自
転車巡行」([https://www.inbong.com/2011/
otonajyuku/0819otona/](https://www.inbong.com/2011/otonajyuku/0819otona/))と題していつか38度
線を越えるのだ!と熱く語ってくださいました。この
会でまた新しいご縁がつながることが嬉しいです。

インボンさんありがとう!!



「ここは韓国か?」 = インボンさんの叫び

特定非営利活動法人 オクン ヒョン
聖公会生野センター総主事 呉 光 現

2002年8月、中国の「延辺朝鮮族自治州成立
50周年記念行事」を楽しむ旅を主催しました。こ
の時初めて高仁鳳（インボンさん）さんとゆっくり
過ごしました。それまではKBSというよりハングル
印刷の僑文社という印刷屋さんというイメージでし
た。関西空港集合の時からからインボンさんはカメ
ラを胸にひたすら写真や動画を撮影しています。ま
さに「カメラおじさん」です。

当時の延辺の街は町中がハングルの看板、聞こえ
てくるのは朝鮮語ばかりです。在日2世の私はアー
ヤー、オーヨーから韓国語を学びましたが、この
子どもたちは普通に朝鮮語を話しているのです。驚
きでした。その時インボンさんは「ここは韓国みた
いだ。ハングルがあふれ、子どもたちが普通に韓国
語を話している」と。

5日間の旅でこのインボンさんの「叫び」が一番
印象に残りました。インボンさんの人生を振り返ると
「異国日本」で民族として、韓国人として堂々と生き
ることが一番大切だったのだと思います。

没後10年。インボンさんとの思い出を振り返る
と中国での旅が胸によみがえります。

bong の page の 2002 年にこの旅の写真日記があ
ります。 <http://inbong.com/enpen/>



高仁鳳ソンベニム (先輩)

建国高校第26期生 キム ヤン ジョ
金 良 子



先輩に初めてお会いしたのは、私が建国での保護者の時でした。建国以外の所でも会って挨拶をかわすことが多々ありました。先輩からも声をかけてくださいました。十数年前、建国

での幼、小、中、高合同体育祭の最後に、校友会代表で朝礼台にのぼり、「白頭学院 万歳！」を三唱された姿を今でもハッキリと覚えています。今回途中からでも実行委員会でお手伝いできて、嬉しく思っています。 後輩より。

家族から見た高仁鳳

ケイビーエス株式会社代表取締役 コウ ユン ナム
高 允 男

没後10年経ってもこのような催しが開催されるということは、周りからとても愛される人間だったようだが、父親としては決して家庭的とは言えない人であった。私が子供だった頃は1階が会社で2階が自宅、3階がまた会社と、公私の区別を付けようのない環境で過ごしていたため、父はほとんど仕事のことしか考えていないようだった。何度か旅行に連れて行ってもらったが、純粋な家族旅行というのはほとんどなく、社員旅行や民族団体関係の旅行について行く形だった。それでも私は最初の子供だった

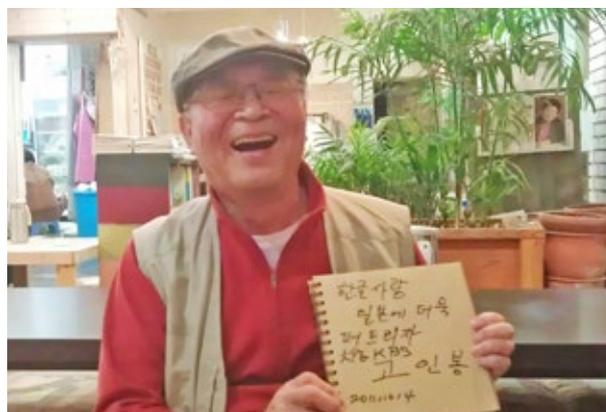


ハンゲルサラン(愛)を日本にもっと 広めよう 大阪 KBS 高仁鳳

学校法人白頭学院 キム ホン ミョン
建国幼小中高等学校事務長 金 弘 明

2011年10月4日、名古屋の韓兄と高仁鳳さんがソウルのソンミサンマウルに行くことになり、ソウルに滞在中だった私に声をかけていただきました。

見学後、親環境の酒場「敷居のない家」(문턱없는 집)に行きました。無農薬・低農薬のマッコルリと食事を美味しくいただいた直後の写真です。高仁鳳さんが手に持っているのが、ご自身で書いた色紙です。なんでこうなっているかはだいぶ飲んでいたので覚えていませんが、店の人がお客さんに書いてもらってその写真と色紙をとっておく趣向で頼まれたように思います。高仁鳳さんらしい色紙の文章だと思いました。その後、だいぶ飲んで食べた後にサイクルショップに入ってやはり長い間時間を過ごしたことを覚えています。一緒にいる人が楽しく過ごせるように配慮をされていた人でした。



ため、映画館など、ちよくちよく連れて行ってもらっていたように思う。

私は父の勤めるまま高校から韓国に留学し、大学を卒業するとしばらく商社で勤めてからKBSに入社した。父は早々に私を社長の椅子を譲ると、会長として悠々自適の生活を送り始めた。かくして母校でイベントがあれば行ってビデオ撮影し、韓国まで行って自転車旅行をし、「鳳@bongのpage」作りに没頭し、多くの人に出会い、食べ、呑み、幸せにあの世に行けたと思う。ある意味うらやましい人生である。

52 「幻のフィルム」を蘇らせた記録者

高仁鳳 (コウ・インボン) 男



取材日／二〇〇七年二月二三日、三月一日 本籍／ソウル市永登浦区 現住所／大阪市 生年月日／一九四一年五月一日 略歴／大阪で生まれ、四七年に全羅北道禮里市に移住。五七年、日本に渡り、白頭学院建国中学校、高校卒業。プラスチック関連業界紙の仕事をしながら大阪経済大学経営学部夜間に通う。六八年、印刷会社橋本社を継承。八九年、ケイビーエス株式会社に改組し代表取締役となり、現在取締役会長。白頭学院建国学校理事、校友会副会長。二〇〇五年、戦争直後の建国学校草創期の様子が撮影された「幻のフィルム」の映像をもとに建国創立六〇周年記念事業としてドキュメンタリー映画を製作。取材／姜志鮮 原稿執筆／姜志鮮

▼幼いころの一時帰国

わたしは一九四一年五月一日に大阪で生まれたけど、四七年に母と九歳上の兄・仁守(インス)と一緒に韓国全羅北道禮里市(現・益山市)に渡りました。父は済州道で生まれ、二〇歳ころから日本に来て、結婚して住んでいました。父は商売をやって小金を持っていたので、あのお金を持って帰れなかったから、そのまま日本に残って。終戦直後は皆早く帰ろう

と急いでいたし、子どもらは学校に行かなければならないから、三人を早く行かして、父は後で整理できたら帰ろうとしたわけです。

それが、一九五〇年に朝鮮戦争が起こって、若者みんな軍隊に引張られました。わたしは禮里中央小学校一年、兄は中学三年に入ったんですが、兄は高校一年のとき、兵隊に引張られて、母とわたしの二人だけ残ってしまいました。お母さん、いろいろ苦労したと思いますね。病気になるって一九五二年に亡くなりました。

父からは五三年二月一〇日に、別れて七年ぶりに、兄宛に「もうちょっと安定してから日本に来なさい」という手紙が来ました。ぼくはソウル中区の散髪屋に住み込みで働いていました。小学校三年から。そしたら兄が「お前は学校に行かなければならない」といって、父と連絡を取って、「お父さんのところに戻りなさい」といったから、日本に戻ったんです。五七年五月一日にソウルから出発して、大阪に着いたのが七月三日でした。一人で密航やな。でも楽しかったよ。

▼白頭学院建国学校での生活

父は大阪でパンの配達をしていて、「高山」という通名を名乗っていました。もちろん朝鮮人はみんな通名を使っていた時代だからね。でもわたしは「高」という本名を使い、「高山」は使わなかった。それが普通だと思ってるね。ぼくが日本に来るまで、父は民団も知らないし、

付き合いがないのよ。ぼくが来て民団を教えました。パスポート作って、それから韓国行って、故郷の済州道にも行って。懐かしいから、「死んだら自分をそこに埋めてくれ」となったわけだから。今は済州道に父と母の墓があります。

日本に来て建国中学校二年に入りましたが、それまで約六年間学校に行ってませんでした。だから小学校三年生から中学校二年生の間、ブランクがあつて。

あのおときぼくは学校に行かんなあかんと思って、父に話して、朝鮮学校を探していったら、朝鮮総連(総連)の中学だから金日成(キムイルソン)元帥の写真が掲げてあつて。変だな、日本には韓国系の学校はないかな。それで父が誰かに聞いて、「建国学校は韓国の学校みたいよ」つて。

でも建国に行くと金日成の写真もなければ、人民共和国の旗もないから、「ここは韓国の旗なんだろうな」と思って入ったんです。でも全然、わからない。隣に座っている子に「おい、この旗はいったいどんな旗やねん」と聞いたら、「え？ 太極旗違うか」つて。ぼくの大極旗に関するこだわり。ある意味では意識が強かったともいえますね。韓国から来て、どうしても太極旗がある学校に入りたいということで建国学校に入ったのに、太極旗がある学校じゃなかった。国旗がない学校でした。

終戦後、間もなく南北両方の国ができて、それから建国ではいつさい旗を揚げなかった。というのは、祖国というのは全体が祖国であつて、韓国だけ、あるいは北朝鮮だけではないという、どちらかに決めつけない教育方針でした。一九七二年ごろ、この理念が変わって、その後

749 52 「幻のフィルム」を蘇らせた記録者 高仁鳳

750

751 52 「幻のフィルム」を蘇らせた記録者 高仁鳳

は韓国系の学校になっていますけどね。建国の教育は、別に押し付けなくて、要するに自由に。教育は自主なんです。だから選ぶのは自分で選ぶ。共産主義思想を持ってもかまわない。そこが建国の素晴らしいところでした。

建国高校のときは新聞部に入ったけど、これがむちゃくちゃ面白い。私学高校新聞連盟のコンクールに出したりして、入選しました。それがものすごく楽しかった。今もいつもビデオカメラ持って、何かニエース的なことがあつたら、撮ったりするわけですけどね。

▼就職、大学進学、そして結婚

でも、高校を卒業してからは就職せねばならないから、ぼくらが作った建国新聞を持って就職活動をし、サラリーマンになりました。プラスチックの業界紙を作るところに。一〇ヶ所以上回ったけど、履歴書は本名やから、ほかのところは全部だめだったんですが、就職できた会社の社長がえらい人でね。ぼくが「親父が使っている日本名がありますから、通名でししょうか」と聞くと、社長は「何やね。お前、本名あるのにそれを使つたらいい。なんで通名使うん。本名使つていいよ」といってくれました。

その新聞社に入った一年後に大学に入りました。昼間は新聞社で働きながら。社長にいったんです。「ぼく、大学に行きます。夜間に」。そのとき夜間大学に行くためには四時半には仕事を終えなければいけなかった。しかし新聞社というのは夜遅くまで働いています。社長が

「お前がもし日本人だったら、わたしは許さなかったけど、お前はこれから在日同胞を背負っていくべき人間やから許す」つて。こんなことで大学に行けたんです。大阪経済大学。

大学に通いながら、今の妻と教会で出会い、付き合いました。そのときは大阪教会に通っていました。教会の組織の中に関西連合会という青年会があつて、よその教会からも来て大阪教会で聖歌隊の練習をしていました。たびたび彼女が来ていたから、「お！ かわいいな」つと。それで付き合つて一九六七年に結婚しました。

結婚した年にはくは僑文社に入りました。もちろん就職していたところもすごく楽しかったんですが、将来は出版社をやりたいかっただんでやめたんです。僑文社というのは印刷会社で、そのときは前の社長がしていました。

在日韓基督教教会が福音新聞を出すために作った会社でした。会社といっても、西成区にある教会の裏庭の小さな九坪の工場で作ってたんですけど。そのとき社長は同時に民団の文教部長をやつていて、印刷の仕事には身が入らなかった。それでぼくに「あと継がんか。これ買わないか」といってくれた。「それじゃ、ぼくが買います」。妻にも話したら、「それじゃやりましょうか」つて。

わたしはあまり印刷の専門じゃないし、妻だって専門じゃない。職人一人雇つて始めたわけね。韓国語の活版印刷の設備と機械一台ありました。ところが、一九六九年に西成教会が教会を建て直すことになり、出て行かなければならなかった。もともと建物・土地の権利はなかつ

たので何の保障もなかった。生野区桃谷の父の家を工場にして引越し、妻は字を拾い、ぼくは機械を回して僑文社を始めました。

▼僑文社からケイビーエス株式会社へ

僑文社を立ち上げて、まずハングルを始めました。とにかくハングルを何とかせねばならないなど。印刷にコンピュータを利用して。東芝で日本語のワープロができたんですよ。それが当時、七〇〇万円でした。でも、これは素晴らしい、印刷の入力に使えるなど思ったわけ。というのが、ぼくは文字を拾うのが苦手でしたから、楽に字を探せる方法、できればキーを利用して文字を探せる方法があればと思つていました。ワープロができたとき、「これはすごい。文字の入力にワープロを使おうじゃないか」と考えました。「日本語ができれば、韓国語もできるに違いない」と。それで電算字種といつて、印刷の文字を拾う、文字を組み合わせる、そのような機械を考え出したんですよ。発明というよりも、アイディアやね。

一九八一年に角川書店から『朝鮮語大辞典』の出版依頼があつて。これは字を一個一個手で拾つてはできっこないと思つていました。それでコンピュータを利用しようということになり、写植機メーカーのモリサワに話を持つていったら、「やってみてもいいな」ということになりました。

ちょうどそのころ、パソコンのワープロソフトで、コアハングルというのができて、それを

入力機に使うことで電算字植用変換ソフトを作りました。当時、だんだん日本も国際化していききましたが、このときにはね、一九七〇年万博のパンフレットは英語と日本語しかなかった。多言語になってなくてね。一九八二年には韓国よりも早く、ハンゲル電算字植の入力機が完成して実用化に成功したわけ。

日本はだんだん国際化していきました。花博（国際花と緑の博覧会。一九九〇年）からいろいろな言葉を使うようになってきて。今では多言語が一般化されて、いろいろな案内が多言語を使うようになりました。そのようなお客さんからのニーズがあり、「韓国語ができるんなら、中国語もできるんじゃないか」というお客さんからの要望があつて、「そちやな。やろう」としてやったわけね。

一九八九年に会社名をケイビーエス株式会社に変えました。それは僑文社の頭文字を取って作ったわけよ。一九九四年には、ぼくらがやっている多言語組版システムが「日本経済新聞」「朝日新聞」の記事にとりあげられましたよ。

▼「幻のフィルム」との出会い

建国の友達とか同級生は深い繋がりがあつて、ずっと続いてきました。子ども三人皆、建国に行かれました。また印刷屋してずっと建国学校の印刷をほとんど引き受けたから。証明証とか卒業証書とかの印刷物や文集とか記念誌も引き受けていて、妻も読んでるから自ずから内

容がわかる。でもやっぱり子どもが通うようになってから再び関わるようになりました。小学校に入ったら小学校のPTA会長になったり。今は学校の理事や、校友会の役員もしています。

「幻のフィルム」との出会いはね、偶然だった。本当に、偶然。二〇〇五年に、二〇〇六年の建国創立六〇周年のために記念誌委員会を作つてね、委員長になつたんですよ。委員長になつたから、原稿を集めたり資料を集めたりするわけね。ある日、交友会の事務室に行つたら、机の上にフィルムの入った段ボール箱があつて、そのなかのフィルム缶に「一九四六年 建国生の日」「一九四七年 二周年八・一五記念誌式典」というメモがあり、「ありやう、これはすごい」と思つて、これを記念誌の参考にと調べ出したんです。

当初、建国創立六〇周年記念誌は校友会の機関紙「白友」のような簡単なものを作ろうと思いましたが、幻のフィルムによつて考えが一変して、やっぱり六〇周年は節目だし、建国の歩みをきっちり記録するべきだと思ひました。ぼくが持つて帰つた箱の中身は、昔の写真とともに、一六ミリのフィルム七本と八ミリフィルム八本でした。一六ミリは一時間、八ミリも合わせると全部で三時間ほどの長さに相当します。九月二九日、フィルムをデジタル変換業者に頼んで、その内容を見て「これはすごい！」と思ひました。

フィルムに映つていたのは戦争直後、白頭学院初代理事長の曹圭訓（チョ・ギョフン）さんが手がけていた播磨護謨合資会社や紡績工場などの様子でした。ここで働いていたのは皆同胞で、徴用で日本に連れて来られ、解放直後、行き場を失つた朝鮮人約二〇〇〇人を曹理事長が

引き受けたと聞いています。建国学校の草創期を記録したのもありました。

原版の内容はこんなんです。まず、一六ミリフィルムの中身から。

一本目は「建国生の日」。ここでは天王寺から阪和線に乗つて、杉本町駅で降りる学生の風景から授業風景、運動場を整備する姿が映つていて、最後には杉本町駅で降りるストーリーになっています。

二本目は「解放二周年記念行事 第一回朝鮮陸上競技（建中）」となつていて、一九四七年八月一五日の第二回解放記念式典が大阪中之島中央公会堂で行われた様子や朝連（在日本朝鮮人連盟）の主催で建国中学をはじめ、朝鮮中学などが中百舌島運動場で行われた体育祭の様子が映りました。

三本目は「朝鮮建国中学校第三回秋期体育大会 第二回文芸祭 一九四八年一月一日」。

四本目は播磨工場で働く風景、ゴム工場で働く様子です。ゴムだけではなく、白頭レコード、紡績や薬品事務所の風景と白頭学院を創設した白頭同志会の会議の様子が映っていました。

次の五本目から七本目の最後までは、「第二回招待陸上競技大会 一九四七年十月二八日」があつて、ここに市岡運動場で行われた様子がぼくが中学高校卒業するまでに学んだ木造校舎、船や播磨工業所の運動場でのサッカー試合。それには李慶泰（イ・ギョント）初代校長や朴燦時（パク・チャンシ）先生が映っています。白頭同志会の青年だろうか、祖国解放を喜び、隠していた太極旗を振つてハンザイを叫ぶ場面や、日の丸をおろして太極旗を掲げる場面もあり

755 「幻のフィルム」を蘇らせた記録者 高仁鳳

756

757 「幻のフィルム」を蘇らせた記録者 高仁鳳

ました。一九五六年体育祭の模様、そして最後は一九五七年四月二日、朴哲（パク・チョル）先生の葬式の模様でした。

ハミリフィルムの中身は、一六ミリフィルムからあとの時期のもので、四〇周年記念式典や御堂筋パレードの模様。このときは一九八八年ソウル・オリンピックのPRのため建国生が多数出ました。林間学舎のプールで泳ぐ場面、建国祭の映像、第一八回文芸祭、金剛山雪の中の登山、高校入試の様子、一三期卒業式の風景、一九七八年二月二十七日の木造校舎を中心に撮影した映像や、第一七回校内音楽会、一九六三年一八回体育祭と文芸祭の様子などが記録されています。

以上が「幻のフィルム」の中身です。ぼくはこれらの記録映像を建国生だけではなく、在日同胞、日本の人々、また本国の人たちにも見せるようにしたかった。そのために理事会にいつてドキュメンタリー映画を製作するようになりました。

▼ドキュメンタリー映画の誕生

まず作業としては、状態は綺麗だけど音はまったくなく、中身がわからないから、内容の聞き取り調査をしたわけ。何分何秒まで刻みながら、細かく場面を分析してやっていく作業は校友会の人と一緒にやったけど、結局皆に見せるためには編集せねばならないと思って、知り合いの日本人に頼んで、一緒に作業しました。

登場人物の名前や学生の名前は、先輩たちに映像を見せたら、「わたしや」というから、その度に記入して。このときの校友会の会長がすごく協力してくれて。インタビューをするためには、あちこち行かなければならない。東京へ行ったり、東北、岩手の先輩を訪ねて行ったり、北海道も行ってきました。その経費を全部この先輩が協力してくれました。

フィルムの編集が終わってから今の学校の授業風景とか、学校の模様とかを撮影して、それを編集して作ることにしました。「過去、現在、未来」というテーマを立てて、テーマに則って作っていきました。

これを製作しながら一番苦労したのは、三〇分の映画を作るなど初めに何も決まっておらず、六〇周年記念式のプログラムを決めるときに、時間が三〇分しかないといわれて三〇分になったんです。三〇分という限られた時間の中で表現することが難しかった。

完成した映画も自分としては上出来だと思うけど、今見たら、これも出した方が良かったんじゃないかな、あれも出した方が良かったんじゃないかなと、いろいろ思いが走るね。九月に見つけて、翌年の五月三〇日上映まで、九ヶ月間、ぼくは朝から晩まで、何回も見たり、映画のことはばかり考えて過ごしました。記念式典で上映されると、皆とても感動して、多くの人々が「これは良かったな」といつてくれました。

この幻のフィルムのごとは日本や韓国の多くのメディアに取り上げられたけど、おそらくその理由は、終戦後いち早く在日同胞の民族教育のために開校した建国の姿を伝える記録フ

ィルムが、建国だけではなく、在日社会、広くは日本社会、韓国社会にとっても貴重な歴史の財産だったからだと考えられますね。そして、この「幻のフィルム」をできるだけ多くの人に見てもらいたいと思ってダイジェスト版ですが、ネットで見られるように載せました (<http://www.inbong.com/2007/kenkoku/>)。

▼今後の夢

今後、できれば民族教育についてのロングバージョンを作りたい。今回は建国六〇周年記念事業として製作し、DVDは記念誌に挿入して配った。ときどき上映会をやったら、全然知らなかったという人が多いね。できれば日本人にも韓国人にも見せたいね。そのためにはもっと一般化して見せられるようなものにして、九〇分のものにして、できればDVDに作って販売できるようにしたいなと思っています。

在日、まず建国やね。あとは韓国系の学校、京都や東京にもあるし。朝総連の学校も取材したい。それから日本の学校も。それと、中国の延辺朝鮮族自治州にある民族学校やロシアにある高麗人学校も取材したいな。そのような学校は、やっぱり記録を残しておくべきじゃないかな。

それで今は、映像表現をどのようにすればいいとか考えながら勉強しています。映画監督に会ったり、撮影現場にも行ってるし。そして、ほかの夢はね。足が動く間にもっと多くのもを見たい。そしてもっと撮りたい。何でも撮りたい。



白頭山山頂（中国側）にて、
ウリナラ全国自転車巡礼の旗を翻して
（2009年7月68歳）

KBS

世界の人と人々が互いに理解しあうために...

多言語印刷ひとすじ

ケイビーエス株式会社 ▶ www.kbsjapan.com

〒544-0033 大阪市生野区勝山北2-16-17 TEL: 06-6716-5665 FAX: 06-6711-2104
E-mail: info@kbsjapan.com